

アウトリーチ

通信



第 10 号
2008 年 3 月 20 日発行
年 4 回発行
神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター

〒662-8505
西宮市岡田山 4-1
電話・FAX: 0798-51-8584

ワークショップ

グレゴリー先生ワークショップと
「音で遊ぶ」

津上 智実



十一月十五日から
二十三日まで、英国
ロンドンのギルドホー
ル音楽院からショール
ン・グレゴリー (Sean

Gregory) 先生をお迎えして、クリエイティブ・ミュージックのワークショップを行いました。ギルドホール音楽院は、一八八〇年創設のロンドン市立の演劇・音楽学校で、学生数約七百名（約四割が海外からの留学生）、入試倍率六・五倍という世界有数の音楽学校です。昨年度の学校案内によれば、この音楽院の特徴は「舞台マネジメントと劇場技術、プロフェッショナル・ディヴ

エロプメント（専門家としての能力開発）、地域社会へのアウトリーチ、そして音楽療法の各分野で傑出している」点とのこと。グレゴリー先生は、アウトリーチの基礎教育を担当するプロフェッショナル・ディヴエロプメント学科の長で、自身、作曲家です。

十一月十四日（水）、成田に到着された先生は女学院に直行、通訳コースとのブリーフィングをこなされ、翌木曜日から学生とのセッションが始まりました。日程は次の通りです。

十五日（木）三限：四年生対象
放課後：三年生対象
十六日（金）二～三限：三年生対象
四～五限：四年生対象
十九日（月）放課後：三、四年生合同
二十日（火）放課後：同右
二十一日（水）四～五限：同右
二十二日（木）放課後：同右
二十三日（金）「音で遊ぶ！」

初日は先生の自己紹介で始まりま

した。自分は音楽家、作曲家であり、本来はクラシック音楽を専門とするが、現在ではジャズやアフリカの音楽などさまざまな音楽と関わっていること、創造性 (Creativity) と共同制作 (Collaboration) を重んじていること、音楽家としてのスキルを多様な場で多様な形で使っていること、ギルドホール音楽院で教えているが、そこでは一九八〇年代後半から社会に出て行くための教育がなされるようになってきたこと、即興、作曲やリーダーシップ・スキルを用いてコミュニケーションをとること、リズム、声やパーカッションを使つて社会と繋がること、これからやることは楽しくて役に立つことなどが分かりやすく語られました。学生たちの自己紹介の後、すぐにアクティビティが始まりました。ストレッチで体をほぐした後、手をこすり合わせるところから、さまざまな拍手（指一本、二本……と増やしてまた減らす）、ボディ・パーカッションと進んで

いきます。リズムも八拍子から九拍子……と広がっていきます。順にメンバーの名前を織り込んでいく内に、グループとしての仲間意識が育つていきます。拍手の音を順に送る、シーとい

う息の音から始まってさまざまな声や鳴き声を送る、そして両者の組み合わせ。拍手は右回り、息の音は左回り、二つのことを同時に進めるのはむずかしいものです。グループを分割しながらポリリズムへ進んだ後、「モバコニモシユエ」というリフレインをもつアフリカの歌と振りを習います。最後に打楽器を持ち出して試してみるところまでが第一日でした。

二日目はウォーミングアップの後、複数のグループで拍手のパターンがずれていくミニマル・ミュージックのエクササイズを行いました。自分のリズムを打ちながら、もう一方のグループが何をしているかによく注





意を払うことが大切で、音楽家は常に複数の異なるパートに気を配る必要があります。次にボディー・パーカッションでリズムを重ねながら、先生の打つリズムを模倣していきます。その後、二人ずつ組になって自分たちのリズムを八拍で作ります。いよいよ与えられた枠組みの中で自らのアイディアを出していく「インタープリテーション」の段階に進んだ訳です。打楽器を持ち出して、先生がボンゴで刻む三拍子のリズムの上に、各人が楽器で自分のリズムを次々と重ねていきます。途中、三拍子の最初の拍頭だけを全員で刻むシンブルな部分が設けられ、ポリリズムの賑やかな部分が交替する構成が与えられます。二回目には、そのシンブルな部分でメンバーの一人が順にソロで好きなリズムを披露することになりました。いよいよ「即興」の段階に進んだ訳ですが、これまでに経験のないことで、皆さこちなさが目立ちます。「即興は怖いかもしれないけれど、グループの他のメンバーがいっしょ支えてくれるから安心して」と助言がありました。次に同族楽器同士で二人ずつ組になって、それぞれ三拍子のリズムを考えます。それを持ち寄

って賑やかなリズムの組み合わせが実現したところで、グレゴリー先生がピアノでコードと旋律を即興し始めます。自分の楽器を出して下さいとの指示があり、ピアノのコードと旋律もピアノ専攻生に任せられます。ホ音上の短三和音とヘ音上の長三和音を一小節毎に行き来する進行を基礎として、好きな旋律を自分の楽器で即興するよう求められます。順に一人一人が即興していくのを聞くと、その人の演奏の技量はもちろん、音楽的な背景や理解の深淺が手に取るように分かります。続いて、ヴァイオリン同士、フルート同士で相談してパートの旋律を決めることが求められ、他のメンバーはトーンチャイムを担当します。ここでもピアノのオステイナートを支えとしながら、ソリの部分、トーンチャイムの部分、全員の部分というように大きな構成がグレゴリー先生の指揮の下で形作られていきます。最後に、今朝のセッションで行ったことをよく覚えておくように、ウォーミングアップ、リズム、歌、即興や曲の組み立てによって行ったことを来週続けて、さらに洗練させて子どもたちとのセッションに繋げていくので、との話がありました。

以上は午前中の三年生対象のセッションの様子で、午後は四年生対象にもう一度行われ、最後の曲作り（同じくピアノのオステイナートに支えられた、しかし今度は四拍子の曲）に時間の多くが割られました。

週明けの月曜日からは三、四生合同です。互いをよく知らないグループが一緒になるので、まず手拍子と名前のエクササイズをたっぷり行います。円陣になって椅子に座った上で、立った床に座ったりのメンバーに合わせた変拍子を刻んでいきます。視覚的な補助がある分やりやすいのですが、それでも集中力が必要です。二つのグループに分かれて、一方は右回り、他方は左回りの順でリズムを刻んでいきます。次に手打ちを「ラフ、ラ、ララ」と「ドレ、ド、ドレミ」と声に替えて掛け合います。互いを見ながらのポリリズムの方が、楽譜に書くよりやさしいとのコメントがありました。



次は全員椅子に座って、右足と左足を交互に踏みしめながら拍手を組み合わせていきます。三拍子を八回、五拍子を五回、次に両者を組み合わせます。さらに七拍子三回を加えます。その後、三グループに分かれて、それぞれが三→五→七拍子、五→七→三拍子、七→三→五拍子と異なる順番でリズムを刻んだ上で、それらを同時に組み合わせます。最初はなかなか決りませんが、三度目には最後がぴしっと揃って終わり、思わず歓声が上がります。

次は足や手でリズムを刻みながら「ナヌマ」の歌のモティーフを様々な音高で好きに入れていきます。タブラの十六拍のリズム、一、二、三、四、五、四、三、二、一拍ずつのリズム、八拍子のリズムを刻んだ上で、これら三つのリズムを三グループで同時に打ったり、順にリズムを交換したりします。これは一つのことをしながら他のグループをよく見る練習にもなります。

火曜日はリズムのエクササイズの後、打楽器を使つての曲作りに時間をかけました。各人の思い思いのリズムを重ねていき、また次第に音を消していくという構成で、途中から四年生の東瑛子さんが、続いて片岡朗子さんがリード役を務めました。リード役は手や顔の表情はもちろん、歩み寄るなど体全体を使つて指示を出します。

最後の曲の印象を話すところから発展して、お祝いに關するキーワードを出し合い、それを繋げて歌にしてリズムと組み合わせることで新しい曲の構想が生まれました。これは「セレブレーション」という曲に発展し、最終日のコンサートで上演されました。

水曜日はウォーミングアップの後、「ヘイ、ダウンバーディエー」というブラジルの歌を歌い、そこに自由に旋律を絡めていきました。次に八拍子で各人の案出したリズムを次々と模倣するスウィッチ・エクササイズを行い、それが一巡したところで再び歌に戻ります。途中から半分は別グループとして「ヘイ・ヤ・ヘー・ヤ・ヘー、ヤララ」を重ねていきました。これはアマゾンの歌で雨が降り続くことを祈るもの、バスカムという有名な音楽家の歌だそうです。

次にピアノとハーブと打楽器群（リズム・セクション）、トーンチャイムの二グループ、フルート群、そしてヴァイオリン群の計五つのグループで、金曜の午前に作り始めた曲をさらに発展させます。各グループで自分たちのアイデアを考えるなど、「インタープリテーション」の比重が増していきます。グループのアイデアをそれぞれ発表して、皆で顕彰し合います。全グループのアイデアが出揃ったところで、どのグループから加わるか、全体の構成を話し合います。「ミソシ、レシソ、フアラド、ミドラ」のオステイナーに支えられたこの曲は（メデイエーション）と名付けられました。



続いて「セレブレーション」を練習した後、もう一つの曲に入ります。「ドードーシ」のピアノのオステイナーに基づいて、一、二、三、四、五、四、三、二、一拍ずつのリズムを交えながら、各グループのアイデアを次々と加えて発展させていきます。ヴァイオリンとピッコロとフルートの学生たちには長いソロの順番が与えられましたが、前回に比べてはるかに自由なびのびと即興を展開する姿には大きな成長が感じられました。この曲は（ミステリアス）と命名されました。

木曜日は翌日のオープン・ワークショップを意識しながら準備を進めます。四年生の器楽曲（メデイエーション）、三年生のホ短調の器楽曲、さらに（ミステリアス）と（モバコニモシユエ）を活用して進めるのでよく覚えてくださいとの話がありました。ウォーミングアップでストレッチをしてから、ボディー・パーカッションに入ります。続いて名前のエクササイズのリズムと、拍手とシーという息の音の送りを行います。拍手とボディー・パーカッションで自分のリズムを刻む練習をして、明日はグループに分けてするので子どもたちをリードするようにとの注意がありました。

次に「モバコニモシユエ」のリフレインをもつ歌を振りつきで。リフレインはすぐに二部合唱になります。「ナヌマワハイエー」の歌は手打ちのリズム

を加えながら、「バラバラバラパタズンズンズン」の歌はボディー・パーカッションと共に歌います。

続いて十六拍のリズムの練習から（ミステリアス）に入っていきます。「セレブレーション」の歌も皆で確認しながら歌い、そこにパーカッションを加えます。まずパーカッション（以下、P）（次第に楽器を増やしてまた減らす、リードは東瑛子さん）、セレブレーションのコーラス、P、フレイズ一、P、コーラス、P、フレイズ二、P、コーラス、P、フィナーレという構成で進みます。明日は子どもたちと新しい言葉を探して歌を作ってくださいとの指示。再び（ミステリアス）に戻り、全体の構成と各グループのアイデアを確認しながら演奏を進めました。

二十三日（金・祝日）のオープン・ワークショップ「音で遊ぼう！子どもたちのための音楽作りワークショップ」は、学生の一週間の学びを総括し、実際に活かしてみようの機会として設けたものです。近隣の学校に呼びかけて子どもたちの参加を募ったところ、三十人あまりが参加してくれました。朝十時に音楽館ホールに集まった子どもたちは、初対面



の学生や知らない人たちの中に放り込まれて固い表情をしていましたが、拍手や名前のゲームを進める内に表情が緩んできました。

アフリカのガーナの歌（モバコニモシユエ）を歌って踊ってから、六つのグループに分かれて、それぞれのリズムを八拍で考えます。全員で一度合わせた後、グループ毎に発表。お互いのアイデアを鑑賞し認め合う大切なプロセスです。六つのリズムの全員合奏と（モバコニモシユエ）の歌を交互に続けます。夕方のコンサートで演奏するから自分のグループとリズムを覚えておくようにとの注意がありました。

今度は楽器を手、打楽器グループ、管楽器グループ（フルートやリコーダー）と民族楽器でグループになります。全員で自分の好きな音を一音長く響かせた後、グレゴリー先生の指示に従ってトウツティで入ったり止めたり、クレッシェンドやデミヌエンド、短い音の入りなどを練習します。ピアノとパーカッション群が（ミステリアス）のオステイナーを弾き始め、ヴァイオリンのソリ、フルートとピッコロのソリが入ります。こうして曲の感じをつかんだ上で、各グループで自



分たちのアイデアを出し合ってどう演奏するかを相談していきます。



一時間の昼休みをはさんで、午後はグループ毎の曲作り、そして〈ミステリアス〉全体の組み立てへと進みます。

まつわるキーワードを子どもたちに出してもらい、それを学生が手助けしながら歌に仕立てていきます。「おいしいケーキ、たつぷりクリーム、甘くておいしいイチゴがたくさん!」といった歌が生まれました。ここでも各グループの発表と歓声、そして全体の組み立てへと進みます。途中から四年生の今中百合さんが全体の統轄を行ない、最後の披露コンサートでもこの曲を指揮しました。



アイデアを持ち寄って決めた旋律やリズムを披露する場が与えられる)、三、子どもたちの言葉が歌になった〈クリスマス・セレブレーション〉、の三曲を順に演奏しました。一日の成果が三十分の演奏に凝縮されます。最後に聴衆の皆さんも巻き込んで一緒に合唱して締めくくりました。



参加した子どもたちからは「みんなとあわせてうたったりしてたのしかった」「おねえさんがみんなやさしかった」「自分でもいろんな曲が作れるんだ」「歌詞や曲をつくりながら最後できあがっていくのが楽しかった」といった声が寄せられました。

保護者の方からは「みんなの目が生き生きしていた」「目を輝かせて表現している学生さんたちが印象的」「短

時間で子どもたちがここまでできるとは驚き」「楽譜なしでスゴイ!」「音と心を合わせている真剣な表情」「皆の心が一つになったことがよく伝わった」といった感想を頂きました。

参加学生からは

「休憩時間にも、



自然にほとんどの子どもたちが楽器に触れたがって音を出し、それを学生たちが手伝っているのを見て、こーうやって音楽はつながって伝わっていくのだなと感じた瞬間が今回の一番の喜び」「音楽には『演奏する』と『聞く』以外に、『一緒に奏でて共有する』方法もあるのだと分かった」「素朴な音をさまざまな形で合わせてみると、新しい大きな音楽に生まれ変わるのだと認識した」「新たな音楽の世界の発見」「まるで眠っていた脳を覚醒させたよう」「先生は『音楽を作り上げる際には、時に主役、時にサポート役に回らなければならない。主役もサポート役もどちらも欠かすことのできない役割である』とおっしゃったが、これは社会においても言えることであると感じた」「定められたコードの上に、自由なリズムと旋律が重ねられ、大人も子どもも、メンバー全員の音楽的なアイデアや意思、個性を大きく包み込んで一つの大きな音楽が生み出されていく。その様子は、まる

で奇蹟を目の前にしているかのよう な喜びを私に与えてくれた」「音楽作りの上で楽譜を最大の拠り所としてきた私にとって、恐らく初めての『紙に記されない音楽』。しかしその拠り所を持たなかったゆえに自由に、時には思いもよらないようなアイデアを羽ばたかせることができたのではないか」「ほとんど生まれて初めて即興演奏をする機会をもらった」「普段話している友人がこんなリズム、こんな表現をするなんて!と新鮮な発見」「お互いを認め合うこと。自己主張と協調性」「本番は無我夢中ですごく楽しかった」「ワークショップが終わり、子どもたちを見送った時からずっと寂しい思い」「最初は一体何が始まるのか、どうなるのか全く分からなかった今回のワークショップだが、受講してよかった」「創造的で達成感があつた」とさまざまな感想が寄せられました。

ジャズ科も即興のクラスもない女学院にグレゴリー先生のワークショップをもって来るのは無理があるのではないかと、時期尚早ではないかという懸念を、学生たちはしつかり吹き飛ばしてくれました。二〇〇六年三月の英国視察で巡り会ったグレゴリー先生の招聘を、このような形で実現できたことをとてもうれしく思っています。また今回のワークショップがきっかけでギルドホール音楽院大学院のプロフェッショナル・デイヴエロブメント学科への留学を考え始めた学生もいます。今後とも交流を

深めていくことができればと思います。
この間、十九日(月)の四限目に「コ
ネクトとギルドホール音楽院」と題する
講演をグレゴリー先生にして頂きまし
た。「コネクト」とは、ギルドホール音楽
院が行なっている地域に開かれた音楽
の創作活動で、学生はもちろん、地域
の子どもたち、保護者、教師からオーケ
ストラやジャズ・バンドまで、さまざま
な立場の人たちが参加してクリエイテ
イブな経験を共有するものです。グレ
ゴリー先生はこの「コネクト」のプログラ
ム・ディレクターでもあり、この活動の
実態と広がりをも、映像資料を交えて具
体的にお話し頂きました。

なお今回の一連のワークショップと
講演会では、神戸女学院大学大学院の
通訳コースの全面的な協力を得まし
た。連日の長時間のワークショップに二
人から四人の同時通訳者と指導の先
生お一人かお二人が張り付いて下さ
って、的確な同時通訳をしてください
ました。そのお蔭でまったくのタイムロ
スなしにスムーズに意思疎通が行われ
て、ワークショップ
アップ自体の精度
と効果を高め
るのに大きく
寄与しました。
ここに記して
感謝します。



子どものための 「コンサート・シリーズ」

第十九回 クリスマス・コンサート



十二月八日
(土)、本学講堂
にて「子どもの
ためのクリスマス
・コンサート」
(子どものため
のコンサート・
シリーズ第十九
回)を開催しま
した(第一部・
十一時、第二部・十六時、来場千
百十一名)。

「音楽によるアウトリーチ」既習生
九名(卒業生)が出演。フルート、ピ
アノ、オルガン、歌による多彩なアン
サンブルで「音楽のおくりもの」をお
届けしました(フルート・山上綾華、
今井さつき、上原梨絵、声楽・海老原
ゆかり、高林保子、谷田奈央、ピアノ・
西村遥子、白坂亜紀、オルガン・川勝
さちこ)。

トーンチャイムの合図で開演。フル
ートが賛美歌を奏でる中、クリスマス
の由来を映像と朗読で語ります。まず
モーツァルト《教会ソナタ》をアンサ

ンブルで演奏。コ
ンサートは元気
のないサンタさ
んを励ますため
に妖精たちが音
楽をプレゼントす
るという物語仕
立てです。妖精



たちはカッチーニ《アヴェ・マリア》を
独唱で、チャイコフスキー《くるみ割り
人形》より《マーチ》(トレパック)をピ
アノ連弾で、フルート三重奏で《あし
笛のおどり》、ピアノとフルートで《花
のワルツ》と次々に演奏していきます。
賛美歌《もろびとこぞりて》やキャロ
ル《ベツレヘムまではいかほど》などク
リスマスにちなむ曲、さらにポジティブ
オルガンとフルートでヘンデル《フルート
と通奏低音のためのソナタ》を演奏し
ました。すると元気になったサンタさ
んが登場。会場の子どもたちもツリー
の飾りつけを手伝ったり、《あわてん
ぼうのサンタクロース》や《ジングル・
ベル》を大合唱。一緒に参加してもら
うことで会場が一つになります。



終演後は
恒例の体験コ
ーナー。今回
使った楽器
(フルート、ト
ーンチャイム、

グロッケン、オルガンや前回人気だっ
たヴァイオリンを弾いてもらいました。
子どもたちは楽器を手にうれしそうに
音を出していました。

プログラムをクラシックの曲で物語
仕立てにするのが難しかったのです
が、皆で相談し、練習を重ねる毎に気
持ちがひとつになって、本番は心をこ
めて演奏することができました。当日
は不安もありましたが、温かい雰囲気
の中で無事終えることができました。
終演後、お客さまから「クラシック
が生で聴けるのがいい。親子で楽しめ
ました」「子どものために工夫された
プログラムでよかった」「楽しかった、
来年も来たい」と言ってもらってうれし
かったです。また裏方のスタッフたち
が一体となって支えてくれて、ひとつ
の演奏会の成功のためには、沢山の人の
力や時間
がかかって
いると改め
て気づきま
した。この
経験を今後
も生かして
いきたいと
思います。



(山上綾華・記)

アウトリーチ実習報告

神戸市立医療センター

中央市民病院



十一月十四日
(水)、神戸市立医療センター中央市民病院(神戸市中央区港島中町四の六)の院内コンサートに出演しました(ヴァイオリン・東瑛子、フルート・片岡朗子、ピアノ・今中百合)。

終了後お話をした入院患者さんは、癌を患ってらっしゃるとのこと。病院という場で自分達に与えられた時間の重みを改めて感じました。神戸市立医療センター中央市民病院の皆様、ありがとうございました。(東瑛子・記)

大阪YMCA

インターナショナルフール

十一月二十八日(水)、大阪YMCAインターナショナルスクール(大阪市港区弁天一の二の二の八〇〇)で二つのコンサートを行いました。



まず幼児学年の子どもたちには、クラシックからミュージカルまでを劇仕立てのプログラムで。世界で一番大切なものを見つける旅を《ホール・ニュー・ワールド》、グノールの歌劇《ファウスト》より《宝石の歌》、リムスキー・コルサコフ《くまのぼちの飛行》、《星に願いを》、シャーマン《小さな世界》などで綴ります。《小さな世界》と《スーパースターフラジリティ》を皆で合

唱した時は一生懸命大きな声で歌ってくれました。終了後の楽器体験ではフルートを吹いてもらいました(声

楽・奥田敏子、松本真奈、フルート・片岡朗子、ピアノ・井上香葉。

中高学年の子どもたちには、ヴァイオリンをテーマにお話と演奏を。アンダーソン《踊る猫》、サン・サーンス《白鳥》やモンティ《チャルダッシュ》で多彩な音色を楽しんでもらい、《ジングル・ベル》などを一緒に歌って一足早いクリスマス気分。最後に体験コーナーを設け、子どもたちにヴァイオリンに触ってもらいました(ヴァイオリ



ン・東瑛子、ピアノ・今中百合)。

インターナショナルスクールでの通訳つきのコンサートは初めてで、どうしてもお話が途切れがちになった(ヴァイオリ

ン・東瑛子、ピアノ・今中百合)。

松本真奈、東瑛子、片岡朗子・記

神戸医療センター

十一月二十九日(木) 神戸医療センター(神戸市須磨区西落合三の一)外来待合ホールでボランティアコンサートに出演しました。(フルート・片岡朗子、ヴァイオリン・東瑛子、ピアノ・杉原真弓)。



楽器の音色を味わいながら幅広く楽しんで頂けるよう、モンティ《チャルダッシュ》、ショパン《エオリアンハーブ》、ポルデューニ《愛の挨拶》をソロで、エルガー《愛の挨拶》、イベール《二つのインターリウド》より《アンダンテ・エスプレッシヴ》、山口景子編曲《日本の四季》などをアンサンブルで演奏しました。

会場は受付横のロビーで、患者さんや職員の方が多数来て下さいました。会場が縦長だったので、なるべく客席に入って歩くようにしました。興味を持って頂けるよう楽器の素材や形、歴史などのお話も。イベールの作品はあまり知られていないので心配でしたが、自然に受け入れて楽しんで下さったので、思い切って入れてよかったです。面白く感じ曲を積極的に届けられるよう勉強していこうと思います。

す。最後に《上を向いて歩こう》《ふるさと》と一緒に歌って頂きました。皆さんが熱心に聞いて下さったり、大きな声で楽しそうに歌って下さったりで、私達も一体感を強く感じる事ができました。演奏後、患者さんたちから「生の演奏が聴けてよかった」「また来てください」とお声をかけて頂き、うれしかったです。神戸医療センターの皆様、ありがとうございます！（杉原真弓・記）

芦屋市立西山幼稚園



十二月五日
(水)、芦屋市立西山幼稚園（芦屋市西山町二十二の十五、高橋弘美園長）にて、クリスマス・コンサートを行いました（声楽・松本真奈、奥田敏子、フルート・片岡朗子、ピアノ・井上香菜）。

「世界で一番大切な宝物」を見つけるといふストーリーに沿って、クラシックからクリスマス・ソングまでを展開しました。

まず、宝物を見つけるために魔法のじゅうたんにのって冒険の旅に出ます。ソプラノ二重唱の《ホール・ニュー・ワールド》で始まった旅は、グノーの歌劇《ファウスト》より《宝石の歌》（大切なものって宝石かしら？）、リムスキー・コルサコフ《くまんなばちの飛行》（悪い魔女の襲撃）、ポルディーニ《踊る人形》（旅の仲間に入れてもらえた魔女からのお礼の演奏）と進みます。次に文部省唱歌《雪》、ヘンデル《もろびとこぞりて》、小林亜星《あわてんぼうのサンタクロース》、パッハ《主よ、人の望みの喜びよ》など季節にちなんだ曲を。《あわてんぼうのサンタクロース》では子どもたちも歌とボーディー・パーカッションで参加。大きな声で元気よく歌って、上手に手拍子と足踏みもしてくれました。みんなで魔法の呪文《スー・パー・カリ・フラジリス・テ・イク・エクス・ピアリド・シヤス》を唱えろと、女神様が登場！宝物が見つかるよう祈りながら《星に願いを》を歌いました。「世界で一番大切な宝物」は今私達が住んでいるこの世界だと分かると、最後に《小さな世界》を全員で歌って冒険の旅を終えました。

先生や保護者の方からはお褒めの言葉と共に、「もう少し子どもたちの知っている曲があるとよかった」などの感想も頂きました。選曲のバランスはいつも大きな課題です。

（井上香菜・記）

西宮市立浜甲子園幼稚園



十二月十二日
(水)、西宮市立浜甲子園幼稚園（西宮市枝川町十二の三、幅多陽子園長）でクリスマス・コンサートを行ないました（フルート・片岡朗子、声楽・松本真奈、奥田敏子、ピアノ・井上香菜、山本佳苗）。

プログラムは《あわてんぼうのサンタクロース》《きよしこの夜》などのクリスマス・ソング、デイズニーの《ホール・ニュー・ワールド》や《小さな世界》、クラシックからグノーの《宝石の歌》やリムスキー・コルサコフ《くまんなばちの飛行》などを盛り込んだストーリー仕立てです。実はこのプログラムは、毎回少しずつ手直ししながら繰り返して今回が三回目。さすがにチームワークもよく、落ち着いて演奏が進みます。子どもたちも大きな声で一緒に歌ったり、静かに聴く場面でも目をキラキラとさせながら演奏に聞き入ったり。やはり目の前で演奏される音楽に触れるのは大きな意味があると思います。アウトリーチ・センターの一員として、今後もこうした場を広げたいと改めて感じました。

（南香代子・記）

雲雀丘学園小学校



十二月十四日（金）、雲雀丘学園小学校（宝塚市雲雀丘四の二の一、岩崎優校長、山本雅子・岡村圭一郎音楽教諭）五年生四クラスで実習を行いました（ヴァイオリン・東瑛子、井上佳那子、ピアノ・今中百合）。

テーマは「ヴァイオリン」。ヴァイオリンの特徴やその魅力を感じてもらえるよう工夫しました。

前半は、動物のイメージを描写した音楽。まずアンダーソン《踊る猫》を、ホワイト・ボードの後ろに隠れて、時々楽器が少しだけ見えるように出して演奏しました。

生徒さんはすぐにヴァイオリンと分かったようで、猫の声を描写したコミカルな曲を楽しんでいました。サン・サーンス《白鳥》、ブルグミュラー《貴婦人の乗馬》でもヴァイオリンの多彩な音色を味わってもらいました。

曲の間では弓の説明や楽器の歴史、材料等についてのお話をはさみ、後半ではモンテイ《チャルダッシュ》を演奏。指が指板の上を動く様子や弓の使い方を間近に見てもらうために、生徒さんの間を歩きながら演奏し、かがんだ顔に近づけたりしました。最後にヴァイオリン・デュオで《クリスマス・メド

レー、牧人ひつじをあら野のはてに」を演奏しました。



終了後の体験コーナーでは一人一人が興味深そうに楽器に触っていました。ヴァイオリンを習っている生徒さんもいて、演奏を披露してくれました。

四十五分の限られた時間でしたが、「ヴァイオリンについて知りたい、もっと聴きたい」と言う熱意が生徒さんから伝わってきて、圧倒されるほどでした。クラス毎の実習で、各々違った反応や着眼点があつてよい勉強になりました。雲雀丘学園小学校の皆様、ありがとうございました。

(東瑛子・記)

ゲスト・ティーチャー

松原美保先生

十二月十八日(金)、三年生の「音楽によるアウトリーチ(講義)」に松原美保先生(宝塚市すみれが丘小学校音楽教諭)をお迎えしました。

先生はご自分の授業にこれまで多くのアーティストを迎えてこられました。まず、初めて演奏家を授業に招いた時のきっかけやその効果につい

てお話し下さいました。CDで立派な演奏を聴くより、少々失敗があつても生で目の前で弾いてもらった方が子どもたちの心にはるかに強く残ること、楽器の不思議について一緒に考えたこと。実際に楽器に強い興味を持つ子どもたちを見て、「これはやっていかなければ」と思われたそうです。

学外でなさった体験型教室の話や、現場で教師として考えてこられたことなども伺いました。また、学生にアウトリーチの履修を決めた理由や考えを質問され、各人に助言も頂きました。



その後、グレゴリー先生のワークショップで学んだボディー・パーカッションなどを使って、学生がフアシリテーターとなつて子どもたちと一緒に音楽を作るといふ仮想授業を実施。子どもたちを動かすには何に気をつけるといいのか(やっている本人のテンションや子どもたちの乗せ方等)、アイディアをどう広げ、それをどう生かすのかなどもご指導頂きました。

今後、アウトリーチ活動を展開していく三年生にとって、学ぶことの多い講義となりました。(寺澤彩・記)

講演会シリーズ

仲道郁代氏



十一月三十日(金)、ピアニストの仲道郁代氏をお迎えして講演会「よりよい音楽のあり方を求めて」イメー

ジ、ピアノ、そしてコンサート」を行いました。本学のアウトリーチ・アドヴァイザーとして、今回が三回目のご講演です。

まずピアノを始めた頃からアメリカでの中学時代、さらに大学を出てから今に至るまでの音楽との関わりを語られました。ピアノを弾けることが社会の役に立ち、人々の喜びとなり、自分の存在意義を感じることができたアメリカ時代、またミュンヘン留学時に今の活動の原点となる経験をされたそうです。

次に、より多くの人に音楽に興味を持ってもらうために展開してこられた多様な活動について。曲に様々なイメージを与えるお芝居を交えてのコンサート、工夫を凝らした小さな子どもたちのためのコンサートなど、二十年間の

多くの経験から得られた思いは「音楽はすばらしい!」ということ。この一言に集約されます。

学生たちを舞台上上げて様々な表情の音を出して遊んだり、聴き手をひきつけるプログラムのポイント、イメージを五感でどのように感じるかなどのお話があり、最後にベートーヴェンの《月光》ソナタを全曲演奏されました。



終了後は、学生たちとのディスカッション。「イメージを持つことの大切さと相手に伝えることの難しさを考えるきっかけになった」とい

った感想や様々な質問が出され、仲道さんは一人一人の発言から本質的なものを汲み取って丁寧に答えて下さいました。受講生からは「講演会後すぐ仲道さんの話を思い出しながらピアノに向かったところ、曲想が一気に生き生きと動き出して純粋に楽しかった」といった感想が寄せられました。デビュー二十周年記念の一連のコンサートを終えられたばかりの仲道さん、これからもお体に気をつけてどうぞご活躍下さい。(寺澤彩・記)

海外視察報告

ニューヨークの

アウトリーチ関連行事に参加して

寺澤 彩

二〇〇八年一月四日から七日までニューヨークを訪問し、①メトロポリタン歌劇場のワークショップ、②アメリカ室内楽協会(CMA)会議、③「音楽院と音楽大学における教育アウトリーチ協会」第二回年総会(CFOCS)の三つに参加してきました。



まずメトロポリタン・オペラ・ギルドではレクチャーやワークショップ、マスター・クラスなど幅広い年齢層を対象とした様々なコミュニティ・プログラムを実施しています。今回のワー

クショップは五歳から十二歳が対象で、参加者は親子で百名前後でした。

この日のオペラはフンパーディンク作曲《ヘンゼルとグレーテル》。まず全員で円形に並んでウォームアップ。ジャンプして高いところのものをつかむ動作、重いもの・軽いものを投げる動作、高い声や低い声を出してみたり、このオペラの有名な二重唱《踊りましょうよ》を振りつきで歌ったりしました。その後、本題のオペラの話へ。スライドを使いながら、スタッフのドティさんが巧みな朗読で物語を聞かせます。途中で「このミルクで何を作るのかな?」と問いかけたり、「これはとても有名な二重唱」とポイントを押さえたり、上手に子どもたちの関心を惹きつけていました。

続いてワークショップ。大道具や背景等を描くこと、お菓子の家作り、お菓子の人形作りの三つを設け、スタッフが手伝います。子どもたちは楽しそうにイメージを膨らませていました。

次にアメリカ室内楽協会会議へ。

CMAは一九七七年、三十四人の室内楽奏者がキャリア拡大を呼びかけ、横のつながりを強めようと立ち上げたものです。期間中は室内楽団体やマネジメント会社、楽譜出版社等がブースを設け、情報交換や分科会、ミニ・コン



サートが行われます。

分科会は「テクノロジー」「組織の体力」「聴衆参加」「プログラミングと演奏」の四つ。

「聴衆参加」の分科会の一つ「若い聴衆：あなたの弾く曲は子どもたちのPodに入っている?」では、優れたアウトリーチ・プログラムを行っている二団体の事例紹介があり、活発な議論がなされていました。

ショウ・ケースと呼ばれるミニ・コンサートではフルート・アンサンブルや弦楽四重奏団、ヴァイオリンとピアノのデュオなど、選りすぐりの団体による演奏が行われ、拍手喝采でした。

七日にはジュリアード音楽院で「音楽院と音楽大学における教育アウトリーチ協会」第二回年総会があり、アメリカから十四校と日本から二校の全十六大学二十五名が集まりました(別表参照)。

まずは五、六人ずつのグループ・ディスカッション。私が参加した班では各校の取組や留学生のプログラム参加について話し合いました。次に各グ

参加校一覧(および参加人数)

Appalachian State-Hayes School of Music (1)
Boston Conservatory (1)
Cleveland Inst.of Music/Case Western Reserve University (1)
Eastman School of Music, University of Rochester (3)
Manhattan School of Music (4)
New England Conservatory (1)
North Carolina School of the Arts (1)
Northwestern University (1)
Oberlin College&Conservatory (1)
Purchase College (2)
The Colburn School (1)
The Curtis Institute of Music (1)
The Juilliard School (4)
USC Thornton School of Music (1)
Tokyo National University of Fine Arts and Music (1)
Kobe College (1)

ループの議論の内容を発表。質問や意見が飛び交います。昼食時にも、学生を取り込む方法や活動資金などトピック毎に分かれて意見交換。活発にアウトリーチ活動をしているCMA弦楽四重奏団のアンニーさん(ヴァイオリン)から、アウトリーチの現場を公開することで学生に興味を持たせるなどのアイデアを頂きました。

最後に、第三回総会開催に向けてこの会を継続・拡大していくための方法も話し合われました。今後の発展にぜひ協力していきたいと思います。

国内視察報告

東京音楽大学

アクト・プロジェクト視察報告

津上 智実



一月二十九日（火）、東京音楽大学（東京都豊島区南池袋）のロビー・コンサートを視察してきました。これは往年のプリマドンナで東京音楽大学教授であった東敦子の遺品のピアノを活かしてロビーで昼休みに四十分間、定期的に行なわれているものです。

「東敦子メモリアルシリーズ第四十四回」の今回は「[Shall] we dance?」屋下がりの舞踏会」と題して、ワトキンス《小組曲》より〈ファイヤーダンス〉（ハープ独奏）、ゴセツクのおペラ《ロジヌ》より〈ガヴオット〉（オーボエとハープ）、ヴィール《ジプシーダンス》（ヴァイオリンとピアノ）、チャイコフスキー《白鳥の湖》より〈助奏、パ・ド・トロワー〉（情景）〈白鳥の踊り〉（オデットと王子のパ・ダクシオ

ン）（終曲）（ヴァイオリン、オーボエ、ハープ、ピアノ）を演奏。各楽器のソロを一曲ずつ、最後に全員でアンサンブルというすっきりした構成で、演奏も《白鳥の湖》の編曲も学部三年生によるものでしたが、聴き応え充分でした。半地下のロビーへ下りる階段の踊り場にパイプ椅子が並べられて、年配の方やサラリーマン風の方など三十人ほどのお客様がゆったりと演奏を楽しんでいらつしやいました。



終演後、このコンサートの企画・運営に当たっている「アクト・プロジェクトJ館ロビーコンサートチーム」（六名）の学生さんたちに話を聞いたところ、選曲や演奏者の選定、編曲者への依頼などもチームで行なったとのこと。配布プログラムの曲目解説と、当日司会者が話した曲目紹介とが着かず離れずの関係でおもしろかった

ので、誰が準備したのかを尋ねたところ、チームのメンバーと出演者で議論しながら決めていったそうです。これは双方の学生にとつてよい勉強の機会になるので、今後、見習いたいものです。アクト・プロジェクト・リーダーの武石みどり准教授からは、暖房の不足の指摘や司会者にもっと笑顔でときめ細やかな助言がありました。なお、このチームの一員の藤川迪子さんは神戸女学院中高部の出身で、高大連携で女学院大学の授業を取ったことがあると声をかけてくれました。

東京音楽大学のアクト・プロジェクトは「音楽のプロをめざす実体験プログラム」として、このロビーコンサートチームの他に、ホールコンサートチーム、エリアコンサートチーム、サイバーチームがあり、活発な活動を展開しています。文部科学省の平成十八年度現代GPを受けてますますの活躍が期待されます。



前号に引き続き、定期的に卒業生が出演しているコンサート・シリーズについてのレポートです！

兵庫県立美術館

☆ 十月十三日（土）

神戸女学院からの二回目の派遣は「ピアノデュオとソロの愉しみ」（ピアノ・服部愛、松川峰子）。ピアノの楽しさを身近に感じて頂くため、よく知られた名曲を中心に組みました。

まず連弾でバッハ《主よ、人の望みの喜びよ》、曲の解説を交えながらシヨパン《スケルツォ 第四番》、リスト《愛の夢》《ハンガリー狂詩曲 第二番》をソロで演奏。再び連弾でチャイコフスキーの組曲《くるみ割り人形》。バレエ場面の写真も活用して、二曲ずつ解説しながら進めました。



多数のお客様にお越し頂き、よく響く素敵な会場で演奏させて頂いてよい経験になりました。（服部愛・記）

卒業生の活動報告

★ 十一月二十四日(土)

三回目は「クラリネットとピアノのデュオ・コンサート」(クラリネット・久保明子、ピアノ・森玉美穂)。

まずブラームスの作品からピアノ独奏で《ワルツ 作品三十九―十五》と《クラリネット・ソナタ 第二番》を、続いてピエルネ《カンツォネッタ》、ウェーバー《グランド・デュオ・コンチェルタン》を演奏、最後はピアノの《リベルタンゴ》で華やかに締めくくりました。

大曲ばかりを並べすぎかとも思いましたが、このシリーズではリサイクル形式のコンサートも多いようで、お客様は飽きることなく最後まで熱心に聴いて下さいました。

学生時代から組んできた私たちがですが、最近特にデュオのおもしろさに魅せられて大きな作品に取り組み始めています。今後のレパートリーにご期待ください。

(森玉美穂・記)



松尾楽器ファミリー・コンサート

(第四、五回目)

★ 九月十六日(日)



第四回はピアノと声楽のデュオ(声楽・谷田奈央、ピアノ・三村祥子)、お客様は小さなお子様から大人の方まで幅広い年齢層でした。

まず中田喜直/サトウハチロー《小さい秋見つけた》と新井満《千の風になつて》を独唱、シヨパンの《ノクターン 作品九―二》と《革命作品十一―十二》をピアノソロで。子どもたちにどちらのシヨパンが好きか聞いたところ、皆うれしそうに答えてくれました。(ちようど半分、半分でした!)



シューマンの歌曲《献呈》を歌った後、今度は同じ曲をリストのピアノ編曲で。声楽とはまた違った魅力です。曲目や何を感じて演奏しているかをお話ししながら、シマノフスキ《仮面劇》より第二曲《道化のタンゴリス》、最後にビゼー《カルメン》より《ハバネラ》を演奏。温かい拍手を頂いて、アンコールに武満徹の《翼》を歌いました。

いかにクラシックを楽しんで頂くかを考え、緊張もしましたが、皆様最後まで真剣に聴いて下さってとても嬉しかったです。(谷田奈央・記)

★ 十一月二十五日(日)



第五回目はフルートとピアノのデュオで(フルート・増田みのり、ピアノ・河本依津湖)、お話を交えながらフランスとロシアの音楽をお届けしました。フォーレ《シチリアーノ》、

サラサーテ《カルメン・ファンタジー》、ラフマニノフ《前奏曲 作品三十二―十二》などで双方の国の特徴や雰囲気を感じて頂きました。《そりすべり》《シングル・ベル》《聖者の行進》などクリスマスに向けた曲も演奏。ピッコロやチェレスタ(松尾楽器のご提案で実現)も使い、ピッコロとピアノ、チェレスタとフルートといった組み合わせでも演奏しました。



会場はアットホームな雰囲気、リズムをとって聴いて下さる方もありました。子どもたちが楽しそうだったという感想も頂いて喜んでいきます。

(増田みのり・記)

今後の展開をどうぞお楽しみに!

卒業生の活躍から

「本物の舞台芸術体験事業」

中村 公美

私はフリーランスのコントラバス奏者として活動する傍ら、アウトリーチ・センタ―に勤務しています。一月にエキストラとして参加した京都フイルハーモニー室内合奏団の「平成十九年度文化庁本物の舞台芸術体験事業」公演の様子をご紹介します。

「本物の舞台芸術体験事業」は、子どもたちに本物の舞台芸術に触れる機会を提供しようと、毎年文化庁が公演団体及び開催校を募集して行なっているものです。京都フイルハーモニー室内合奏団は「クオリティは高く、ステージは楽しく」をポリシーに、定期公演や子どものためのクラシック入門コンサートなどを主催する他、学校音楽観賞会でこれまでに二千五百校、百万人以上の子どもたちに音楽を届けられました。

今回は一月二十日（月）から二十四日（木）まで毎日一校ずつ、山口県と広島県で音楽鑑賞会を行いました。各校へは事前に京フィルのソプラノ歌手が訪れて、本番で共演する合唱曲の指導を行っています。演奏会当日はど

の学校も温かくもてなして下さって、地域の方々まで心待ちにして下さっていたことが伝わってきました。訪問校は大抵山間部や街から離れた所にあるので、プロの音楽家の演奏を聴く機会は滅多にないのだと思います。



コンサートは歌のお姉さんのお話で進められます。小学校プログラムでは、演奏者と指揮者の紹介に続いてビゼーの《カルメン》（前奏曲）を演奏、迫力ある演奏に子どもたちは一気にひきこまれます。次に弦楽器、管楽器、歌が主役の曲を順に演奏。弦楽器はヴィヴァルディ《四季》の《春》第一楽章。管楽器は二本のクラリネットが大活躍するアンダーソン《クラリネット・キャンディ》。ソプラノ独唱はオッフェンバックの《ホフマン物語》より（人形の歌）。人形に扮するお姉さ

んのコミカルな動きに子どもたちは大喜び！途中で何度か動きが止まると、その度にオーケストラの後ろから大きなネジ回しを持った奏者が走ってきて背中へのネジを巻き、何とか最後まで歌いきることができました。

楽器紹介では弦、管、打楽器にわけて特徴を簡潔に説明。音色の紹介も巧みです。弦楽器では《きらきら星》を数小節ずつヴァイオリンから順に演奏、最後の二小節は四種が揃って美しいハーモニーを奏でます。管楽器と打楽器も同様で、子どもが飽きないようよく工夫されていると感心しました。

前半の最後はベートーヴェンの《運命》第一楽章をカットなしで演奏しますが、子どもたちの集中力は途切れることなく演奏に惹きつけられています。



休憩後は子どもたちの合唱と共演です。学校によって異なりますが、大抵は低学年と高学年に分かれて、この日のために練習してきた曲を披露します。低学年は私たち奏者もつい笑顔になってしまいうほどかわいらしく元気な歌声を、高学年ではぐんと大人っぽいきれいなハーモニーを聴か

せてくれました。最後に各校の校歌をオーケストラ伴奏で歌ってもらいます。



次はヴァイオリンの体験コーナー。一度も触ったことのない子ども二人を選び、最後には京フィルと合奏してします！曲は《おもちゃのチャチャチャ》。最初にオーケストラだけで「チャチャチャ」の部分が空白の演奏をして何の曲か考えてもらい、その「チャチャチャ」の部分を弾くんだよと教えます。楽器の構え方と弓の持ち方を指導し、「おもちゃのミミミミ」おもちゃのミミミミ」と、高いほうの二本の解放弦だけを使って弾く練習をして、ついに京フィルと共演です！「ミミミミ」の移弦が難しいのですが、みんな立派に独奏できて会場は拍手喝采。演奏中は会場全体がソリストを見守

り応援する雰囲気包まれます。こんな方法もあるのかと驚きました。二人の子どもにはメンバー全員でサインをした色紙をプレゼントします。

趣向はこれだけではありません。ロッシーニの《ウィリアムテル》(序曲)を三本のほうきのパッパと共演します。長い竹ぼうきの節をくり抜き、



柄の先にマウスピースをつけて、音程を変えるのは奏者の唇です(トランペット、ホルン、トロンボーン)の各奏者が大活躍!。管楽器の特性から曲は変ロ長調に編曲されています。三人の奏者が会場を動き回って演奏するので、ほうきからちゃんと音が鳴っているかわかって皆びっくり!

次はフルート奏者とクラリネット奏者のリコーダーソロ付きでロブレス《コンドルは飛んでゆく》。子どもたちに馴染みのリコーダーも、管楽器のブロが吹くとまるで違う楽器に聴こえます。最後はロジャース《ドレミの歌》と一緒に歌って締めくくります。その後は「質問コーナー」。「どうしてその楽器を選んだのですか?」「毎日どれくらい練習していますか?」

「どうしてみんな黒い服?」から「全部の楽器をあわせてたらいくらですか?」「みんな京都に住んでいるのですか?」なんていう質問まで飛び出し、その一つ一つにメンバーが丁寧に答えていきます。アンコールに京フィルおなじみのJ・シユトラウス二世《ホルカ わつはつは》を演奏、会場は笑いに包まれて終わりとなりました。

中学校プログラムではより本格的な作品が入り、吹奏楽部と共演します。

私たちは毎日同じプログラムを繰り返し演奏します



が、どの学校でも子どもたちは楽器や演奏に目をキラキラさせています。そんな笑顔を見ると個々の演奏会の重みがぐんと増して、毎回新鮮な気持ちで演奏することができました。

始めから終わりまで子どもたちを飽きさせないプログラムは京都フィルハーモニー室内合奏団ならではのものです。毎回の演奏会を丁寧に、手を抜かず継続することでプログラムは充実し、レパートリーも拡大していくのだと実感しました。

履修生紹介

四月からは、私たち新四年生が
実習に伺います!



前列右から

友田麻依加(ピアノ)

藤田理世(声楽)

大澤侑子(ピアノ)

先間恵子(声楽)

今枝留里(声楽)

後列右から

井上智恵子(ピアノ)

中村亜彌子(フルート)

能登由衣子(フルート)

金岡伶奈(声楽)

三年生の後期から「音楽によるアウトリーチ」を履修してきた四年生十名、一人ひとりからのメッセージです！



片岡 朗子 (フルート)

音楽によるアウトリーチの授業を履修して、音楽を使ってくることの可能性の広さを知りました。みんなと一緒にたくさんさんのコンサートができて、なにより音楽を楽しめて本当によかったです！



松本 真奈 (音楽)

アウトリーチの実習を一年間させてもらって、今まで以上に音楽が好きになりました。一緒に音楽を創った仲間、指導して頂いた先生、センターのみなさん、私達の音楽を聴いて温かい拍手をくれた観客のみなさん、すべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。この経験をこれからの音楽活動に生かしていきたいです。



東 優子 (ヴァイオリン)

音楽を通して自分に何ができるのか。アウトリーチとは、こうした問いかけから音楽と自分の力や可能性を見つめ、その限界を広げていくことなのだと思います。そうして得られる経験や出会いこそが、音楽を学んでいく上での、新しい情熱の源となってくれると信じています。



森 理菜 (ピアノ)

この一年半アウトリーチを履修して、音楽に対する新しい視野が広がり、新たな音楽の魅力を知ることができました。また、学校、病院、施設：様々な現場の方から直接アドバイスを頂いたり、実際に実習に行かせて頂くことによって、聴衆のことを考え、聴衆に合わせた音楽を提供する大切さも改めて実感できました。これから履修される皆さんも、きっと卒業される頃には充実感でいっぱいだと思います。頑張ってください！



今中 百合 (ピアノ)

アウトリーチの授業を二年間受けることができて本当に良かったです。他の音楽大に通っていたらできない経験をたくさんさせて頂くことができて感謝しています。これからもこの経験を生かしてさらに自分のスキルアップへつなげていきたいです。ありがとうございました。



奥田 敏子 (声楽)

アウトリーチでは本当に貴重な経験ができました。観客、外部の企画者、出演者など、ひとつの演奏会にたくさんの方との関係があることを、そしてその中で多くのことを学びました。また演奏プログラムを一から創ることはとても有意義な経験でした。ただ自分が演奏したいものを演奏するのではなく、本当に望ましいのはどんなプログラムなのかを考えることは、アウトリーチに限らず音楽をやっていく上でとても大切なことだと思います。なにより、アウトリーチは音楽を演奏する喜び、聞く喜びを改めて感じる事ができる場所もあります。忙しいけれど学ぶことも大きい。また忙しさの中でないと学べないこともあります。アウトリーチを履修して良かったです。



中須 真実 (ピアノ)

アウトリーチの授業や活動を通じて多くの方々と触れ合い、たくさんの方の貴重な体験をさせていただきました。音楽の持つ力や可能性を改めて感じる事ができ、本当によい経験になったと思っています。ありがとうございました。



山本 佳苗 (ピアノ)

アウトリーチ活動は私の音楽への姿勢を見直す良いきっかけになりました。自己満足の音楽を提供するのではなく、広い視野をもって互いに音楽を共有することを学びました。この貴重な体験を今後にも生かしていきたいと思っています。



井上香菜 (ピアノ)

実習として様々な場所
で演奏をさせていただいたこの一年間
は、音楽と人間との関わりについて深く考える機会となりました。音楽を通じて多くの方々と触れ合うなかで音を奏でることの喜びを改めて実感することができ、私自身一つ成長できたように思います。このような機会を与えてくださった皆様に感謝致します。



杉原真弓 (ピアノ)

アウトリーチで、音楽をお客さんと一緒に楽しむ喜びを学びました。病院での演奏会の時、《ふるさとの四季》《上を向いて歩こう》を全員で歌ったのがとても思い出深いです。長い期間入院中の患者さんに、少しでも楽しんでいただけるよう、これからも頑張ります。

♪子どものためのコンサート・シリーズ♪

- 7月7日 (土) セタコンサート
- 10月20日 (土) スペシャル・コンサート～5つの弦楽器とピアノのゆかいな音楽会～
- 12月8日 (土) クリスマス・コンサート
- 3月8日 (土) スペシャル・コンサート～コントラバスの魔術師 ゲーリー・カー登場！～

♪アウトリーチ実習♪

- 7月2日 (月) 神戸女学院中学部
- 7月28日 (土) 野木病院
- 7月29日 (日) 西宮名塩伝道所
- 8月21日 (火) 神戸愛生園
- 9月11日 (火) 大阪府立成人病センター
- 9月13日 (木) 神戸市立医療センター中央市民病院
- 9月19日 (水) 兵庫中央病院
- 10月19日 (金) こやの里特別支援学校
- 11月14日 (水) 神戸市立医療センター中央市民病院
- 11月28日 (水) 大阪 YMCA インターナショナルスクール
- 11月29日 (木) 神戸医療センター
- 12月5日 (水) 芦屋市立西山幼稚園
- 12月12日 (水) 西宮市立浜甲子園幼稚園
- 12月14日 (金) 雲雀丘学園小学校
- 2月19日 (火) 西宮市立西宮浜小学校
- 3月6日 (木) 国立病院機構 刀根山病院

2007 年度 活動履歴

♪その他の行事♪

- 9月21日 (金) ひよこプロジェクト講演会
- 11月15日 (木) ギルドホール音楽院ワークショップ
- ～22 (木)
- 11月19日 (月) ショーン・グレゴリー先生講演会
- 11月23日 (金) 音で遊ぼう！～子どものための音楽作りワークショップ～
- 11月30日 (金) ひよこプロジェクト (西宮市立子育て総合センター付属あおぞら幼稚園)
- 11月30日 (金) 仲道郁代氏講演会

「子どものためのスペシャル・コンサート ～すてきだね、日本語の歌！～」事前企画

「子どもの詩コンクール」作品大募集！

7年目に入った神戸女学院「子どものためのコンサート・シリーズ」、毎回子どもたちの舞台参加や楽器体験を大切にしてきました。日本語の歌をテーマにした今回（シリーズ第22、23回）は、子どもたちから詩を寄せてもらって、それを歌にして舞台にのせたいと考えています。

応募資格：全国の小学生～高校生（または19歳以下の方）

応募期間：2008年4月3日（木）～4月24日（木）必着

特賞入選者の作品は、曲をつけて11月のコンサートで演奏されます！

詳細は……

<http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/>

「子どものためのコンサート・シリーズ」第22回（神戸公演）・第23回（東京公演）

子どものためのスペシャル・コンサート ～すてきだね、日本語の歌！～

出演：釜洞祐子（ソプラノ）、松川儒（ピアノ）、津上智実（企画・司会）

【神戸公演】2008年11月22日（土）15時開演 神戸新聞松方ホール

【東京公演】2008年11月24日（月・祝）15時開演 東京文化会館小ホール

音楽をお届けします！！

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。

大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場ですてきな音楽のプログラムをお届けします。

♪**小中学校へ**：総合的学習支援プログラムとして、

子どものための楽しい体験学習を！

♪**病院や美術館へ**：催しの趣旨に沿った手作りの音楽

プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…

神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター

〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL & FAX: 0798-51-8584

E-mail: outreach@mail.kobe-c.ac.jp <http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/>

編集後記

来年度も盛りだくさんの予定ですので、お楽しみに！（井本）

学生さんと一緒に走った、ボリューム満点な1年間でした！（寺澤）

充実した1年間、学生さんと共にたくさんの出会いがありました。新年度も頑張ります！（三上）

雨ニモ風ニモ学生さんニモマケズ。成長したかな？私。（南）

どんどん充実していくアウトリーチ通信…私たちの大切な記録です。（中村）

初めて企画した詩のコンクール、子どもたちからどんな言葉が届くか、とても楽しみです。（津上）